

なかつかわ民話
てつがんぼうさま



記 録 徳 広 誠 男
再話・挿絵 磯 野 楓

なかつかわ民話
てつがんぼうさま





「おばあちゃん、

かゆいかゆい。

かゆくてしょうがないよ。」

「そりゃ、山で遊んでるうちに

うるしにかぶれたのじゃろう。

大丈夫じゃ、泣かんでえい、て

つがんぼうさまにお願いした

らしゅつと治るき。」

おばあちゃんに手を引かれ、さわたり橋を渡って、
細い山道を登っていく。

すると、とても太くて大きな榎の木の根元にてつが
んぼうさまの立派なほこらが見えてきた。
てつがんぼうさまは立派で神々しかった。
おばあちゃんとぼくは、かゆいのが治まるようお願い
いのお祈りをした。

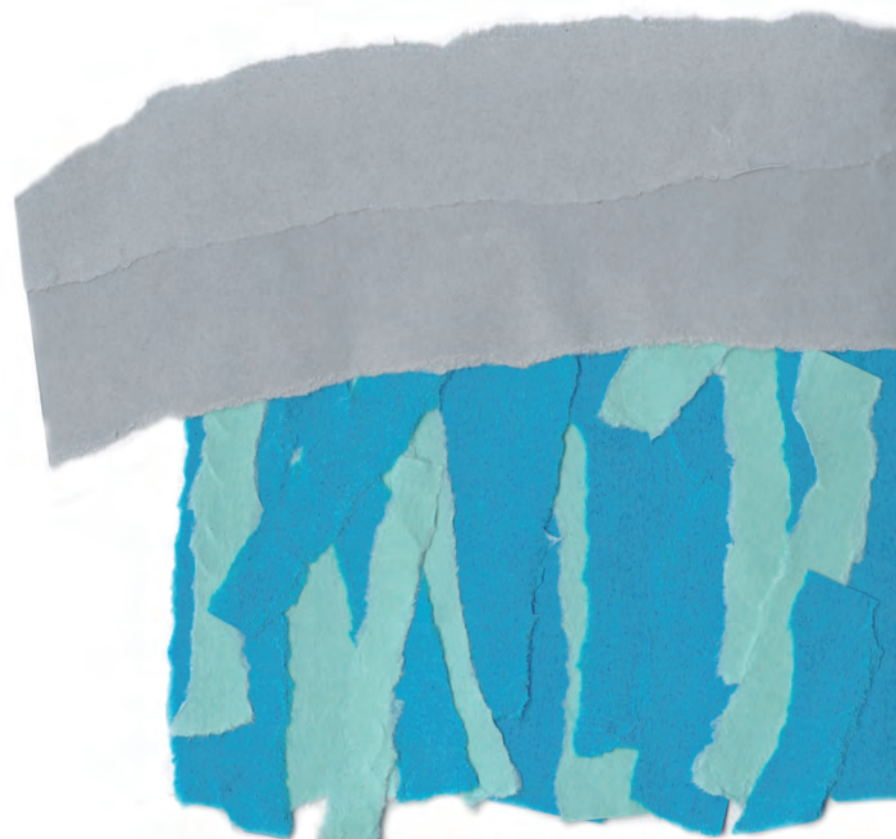




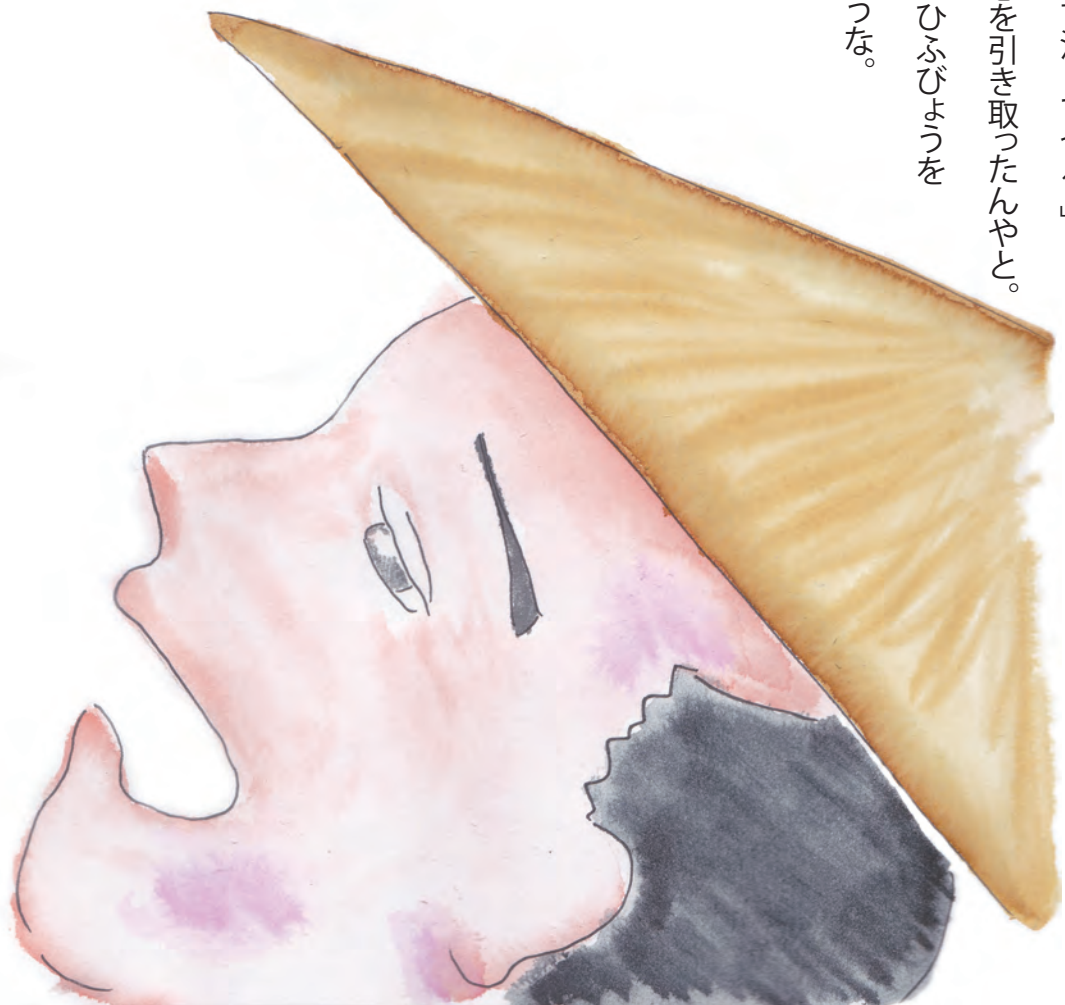
「おばあちゃん、つがひ、おめでとう。」
「それはねえ…」



むかしむかし、
山を越えてやってきた一人の旅人が
さわたり橋の近くの茶堂でたおれちよつたと。



むらの人たちが心配して見に行くと、旅人はもう息も絶えだえやったそうな。
そして「私はもう死ぬる。死んだらすまんがとむらつてくれ。その代わりにひ
ふびよつの者を必ず治してやる。」
そう言い残して息を引き取ったんやと。
その旅人はひどいひふびよつを
わずらっていたそうな。



むらの人たちは旅人をあわれんで、道の脇
にある榎の木の下にていねいにほうむって、
そこに祠を建てたそうよ。

いつのころからかその祠は
「つつがんぼつなま」
と呼ばれるようになったのだよ。



そのうちに、

てつがんぼうさまはひふびょうだけじゃのうて、

他のいろんな病もよう治してくださるゆうて、

遠くの窪川や松葉川の人たちも

願掛けに来るようになったがよ。



「見てみたいたくさん布切れがつるしてあるろう、
それはみなてつがんぼっさまのおかげをいただいた人の
お礼の旗なのよ。」



それから数日たって、ぼくのかぶれはすっかり良くなった。

おばあちゃんとぼくはお礼の布切れを用意して、また

てつがんぼうさまのところに行った。

「早く良くなって良かった良かった。てつがんぼうさまのおかげじゃ。」

おばあちゃんはそう言って、

用意したお礼の布切れを1番上に括り付けた。



それからいろんなことがあった、
大きな戦争があったり、
台風が来てあの榎の木が倒れたり、
自動車を通る道ができたしたりした。



てつがんぼうさまは少し小さくなったけれど、
まだここにいる。

旗もたくさんかかっている。



なかつかわの歴史を残す②
なかつかわ民話「てつがんぼっさま」

発行 二〇二二年二月

企画 大正中津川集落活動センター「こだま」

高知大学地域協働学部

協力 徳広誠男 佐々木澄江

再話及び挿絵 磯野楓

関連事業

二〇二〇年度地域生活特別講義「作って活かす地域資源目録」

二〇二〇年度四万十町「四万十川の利活用推進モデル構築事業」





3 3 . 2 6 5 , 1 3 2 . 9 8 8